噛む楽しみは広がる

石田 慎一郎（いしだ しんいちろう）
国立民族学博物館外来研究員
日本学術振興会特別研究員

噛む嗜好品「ミラー」

石ころだらけの坂道を下ると、若者たちの溜まり場がある。昼下がりの茹だるような暑さのなか、私は、若者たちにまじってしばし疲れた身体を休める。ひとまわり挨拶の握手をして腰を下ろすと、若者の一人が、ミラーをひと束分けてくれた。緑色の葉っぱを落とし、赤みがかった瑞枝（みずえ）を口のなかに運ぶ。こうして仲間とともにミラーを噛んでいると、いま自分はメルの村にいるのだとあらためて思う。

ミラーとは、ここケニア中央高地のメルの人びとのあいだで、噛む嗜好品として古くから愛用されてきた樹木の名前である。口に入れるのは摘みとった新鮮な枝で、それには弱い覚醒作用がある。眠気を吹き飛ばすとも、身体の疲れをとるともいわれる。わずかに苦みがあるので、メルの人びとは、ピーナッツと一緒に噛んだり、ミルクティーや炭酸飲料をすすりながら噛んだり、あるいは砂糖をなめながら噛んだりする。アイディア次第で味わい方は変わる。

楽しみ方は多種多様だといっても、日ごろから噛んでいるのは男性だけで、女性で愛好家というのは見たことがない。女性が噛むのは、たとえば一生に一度のこんな場面だ。恋人どうしの間柄にある男女が結婚の気持ちを固める。すると、相談を受けた彼の父親が、彼女の父親のもとに一束のミラーを持参する。彼女が、自分の父親の前でそのミラーを噛むならば、結婚を望んでいるという正式な意思表明になる。ミラーにはそんな用途もある。

ミラー
（学名:*Catha edulis*）

ニシキギ科の常緑低木。イエメンをはじめアラビア語圏ではカート、エチオピアではチャット、ケニアではミラーとよばれている。摘みとった瑞枝（地域によっては新芽や若葉）を噛むことで覚醒作用を得られることから、一部の国では法律で使用が規制されている。ケニア国内最大の生産地である中央高地のニャンベネ山稜一帯では、利用の歴史が古く、19世紀末に出版された探検記にも記録が残っている。

国内外各地へ広がる市場

ミラーは、村人にとって、日々の生活を支える貴重な収入源でもある。村の人びとがつくる換金作物といえば、むかしはコーヒーが主流だった。けれども、一九九〇年代になると、市場価格が低迷したコーヒーに見切りをつけて、ミラーの栽培に切り替える人が急増した。

良質のミラーは、ケニアでは、土壌や気候の適したメルの土地でしか栽培できないといわれる。しかも、次から次へと新芽を育み、一年を通して収穫が絶えない。村人たちは、この恵みの木を大切にし、枝葉の剪定や防虫など日ごろの手入れを怠ることはない。

メルの人びとがつくるミラーの買い手は、その多くがソマリだ。ソマリの人びとは、隣国ソマリアのみならずケニア国内にもいるし、なかには内戦のために難民として欧州に渡った人たちもいる。こうして、ミラーに対する需要は、国内外で各地に広がりつつある。

かつてメルの人びとにとって、ミラーは自分たちが楽しむ分だけで十分だった。それがいまではお金になる作物になり、村のあちこちに植えられるようになった。そして、収穫量を増やすために必要以上の農薬を散布する人や、学校を欠席してまで収穫や出荷の手伝いをする子どもまで出てきて、村で大きな問題になっている。

村の人びとは、老木から摘み取ったものの方が美味だという。ここ一〇年のあいだに植えられた数多くの若木とはだいぶ違うのだ。新しい時代を迎えたいま、人びとは、ミラーとの上手なつきあい方を模索している。

ミラーの瑞枝は、幹のいたるところから次々と生えてくる。10センチ以上の長さになれば収穫できる

手の届くところで収穫できるよう、上に伸びる枝葉を剪定するので、ミラーの木の多くがこんな形状になる

葉を取り除いたミラーはしばし乾かしておく。朝露でしめったまま梱包すると日もちが悪くなる

梱包のすんだミラー。これらがソマリの商人の手に渡り、ソマリアや欧州に向けて出荷される

マーケットの脇の加工現場では、男女の労働者が葉をとり除き、長距離輸送用に梱包する

早朝、村のマーケットではミラーの取り引きが始まる。ここで収穫物が生産者から村内の加工業者の手に渡る